ひとねこ半々！

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとねこ半々！

【Ｎコード】
Ｎ０９６９Ｒ

【作者名】
シトラチネ

【あらすじ】
おばーちゃんちの玄関を開けたら、金髪頭の空き巣が転がっていた。猫耳と尻尾を生やした人種不明な男は飼われていた猫だと主張し、横柄な態度で要求開始。拒否したくてもさせてもらえず奮戦するうち知ったヤツの目的に、つい。――猫の日を祝して２月２２日０時に投稿した一人イベントもの。

おばーちゃんちの玄関を開けたら、金髪頭が転がっていた。

留守番を頼まれたおばーちゃんちの玄関を開けたら、金髪頭がどてら羽織って転がっていた。

靴箱に飾ってあった花瓶を頭上に振り上げる。

「どちら様でしょうか」

どてら様でしょうか、とボケてやる慈悲はない。

留守を任された以上、犯罪の処理も任されているはずだ。空き巣退治はこの手（が握る花瓶の強度）にかかっている。

うつ伏せで板の間に転がっていた空き巣は、のっそりと上体を起こそうとした。

「動かないで下さい。元テニス部の威信をかけて、頭をスマッシュしますよ」

空き巣は四つんばいで静止した。

『女子大生、お手柄！　空き巣に華麗なウィニングショット』という新聞記事を額に入れて飾りたい欲望と戦う。

空き巣は四つんばいから尻を落とした格好でうなだれている。あなたがやったんですねと言い当てられた真犯人がガックリとひざまずく、おなじみのポーズだ。拳を握ってるのも無念な犯人っぽくていい。

「盗んだものを出しなさい。まずは、着ている祖母のどてらを脱ぎなさい」

独居老人宅で空き巣という弱者狙いの卑劣な犯罪者だが、反省してるなら解放に応じないこともない。不況下の空き巣以上にこっちは忙しい。

空き巣の金茶色の髪はボサッと長くて表情を隠している。毛先を透かして見える唇がゆっくり動いた。

「動かないことには脱げないのだが、どうしろと？」

右手で花瓶を臨戦態勢にキープしながら、左手で携帯を取り出す。

「もしもし、駐在さん？　わたし鑓田サトの孫です。祖母の家で祖母のコスプレしてる空き巣を始末して下さい」
解放は取りやめて応援を要請した。
不遜な微笑を浮かべた口元が反抗声明を出したのだ。国家権力を動員して受けて立つ。
携帯の向こうの頼れる国家権力はプッと吹きだした。
『鎗田のばーちゃんちに空き巣ぅ？　はっはっは、ないよ、ないッスよ。あの家には番犬よりどう猛な山猫がいるんス』
「ヤマネコは天然記念物で絶滅危惧種です。飼ってたら祖母が始末されます。祖母が飼ってるのはベンガルです」
十年以上も前、家族旅行で行った沖縄でサトばーちゃんはヤマネコに惚れた。夜中に網を持ってホテルを抜け出そうとしたところを、おとーさんに捕獲された。再犯の可能性があったので、おとーさんはベンガル猫をプレゼントした。
おとーさんはベンガル猫を「はい、母さん。ベンだよ」と言って渡したが、「アンタにはシットって名前の猫を英語圏で飼う勇気があるのか」と言い返されて、猫の名はガルになった。
小学生だったわたしは、全世界のベンさんに謝れと思いながらヤマネコ似の子猫をなでていた。
「わたしが駐在所で全裸になって、『誰か助けて駐在さんがー！』と叫ぶ前に来てくれますね？」
『あんた間違いなく鑓田のばーちゃんの孫ッスよ・・・・・・！
す、すぐ行くッスハァハァ』
気持ち悪い息遣いで携帯が穢される前に通話を切った。
両手で花瓶を構え直しながら、家の奥へ目を走らせる。サトばーちゃんのベンガル猫、ガルの姿が見当たらない。駐在の言う通り凶暴なので、空き巣に怯えて隅っこで震えてるなんて可愛い事態になっているはずはない。
会うのは久しぶりだが、覚えられているはずだ。今回みたいにサトばーちゃんが入院したり、温泉旅行に出かけたりするたびに世話

してやったのだ。あのちゃっかり猫は餌をくれる人間だけは何年経っても忘れない。

なのに、家の奥ではコトリとも音がしない。不安が胸をよぎる。

玄関を開ければ、とととと、と板の間を鳴らしてわたし（の持つ餌）を出迎える賢い猫なのだ。とはいえ老齢、まさかボケてうっかり空き巣を出迎え、魔手の餌食になったのでは。

「ガル！」

「にゃう」

「黙れ空き巣。ガル！」

「にゃう」

「駐在さんを呼んだのは間違いでした。空き巣の頭を打ち割りたい衝動と戦わなくて済んだのに」

「七代祟られたいならやってみればいい」

「ずいぶん気の長い脅し文句ですね」

反抗的なのが口だけでは済まないかもしれない。もぐら叩きのように、空き巣が動けばすぐ殴れる反射神経を準備してにらみつける。

黄緑がかった金色の、硫黄色とでも呼ぶべき瞳が見返してきた。どこかで会ったような感覚がよぎったが、これほど珍しい色の目をした人が記憶にないはずがない。

そのまま無言で空き巣を観察した。

まず人種が謎である。

ベージュの肌ときっぱりした目鼻立ちはエキゾチックだ。硫黄色の瞳はエキゾチックで片付けていいのか分からない。ボサッとした髪はいつカットしたんですか、と美容師に嘆かれそうなほどだらしなく伸びてるくせに髪色は根元まできちんと金茶。染めてる気配がない。

次に年齢が謎である。

がっしりして骨太なのは体育会系二十代だけれど、顔の線には十代の少年の中性的な滑らかさがあり、そして目の据わり具合にはかなりの年季が入っている。

さらに服装が謎である。
サトばーちゃん愛用の朱色どてらの下は和装だ。任侠モノでよく見る派手な柄シャツ、鯉口シャツの豹柄を着て、頭には共布の豹柄猫耳を装着している。尻尾までである。下は祭装束でおなじみのぴったりしたハーフパンツ、半股引。そして草履。冬なのにナマ足全開。
強盗がサンタクロースのコスプレをするのは実に合理的な選択だ。クリスマス期に溢れるサンタ姿で相手を油断させ、人相をごまかし、逃走を容易にする。
つまりコスプレとは時と場所を選んでこそ効果を発揮する。
高齢者ばかりの過疎化地域で空き巣を働く場合、和服と猫耳のコスプレは合理的とは言えない。空き巣じゃなくても職務質問されるだろう。されるべきだ。されずに留守宅に潜り込めたのがむしろ奇跡だ。怠慢な駐在を叱りつけたいが、喜ばれそうだから断念する。
恐らく真相はこうだ。着る物に困った放浪貧乏外国人がゴミをあさったところ、和服と猫耳しかなかった。でも寒いから（気に入ったからではないと思いたい）全部身に着け、それでも寒いから空き巣に入ってどてらを着た。そこを猫に目撃され・・・・・。
「ガルはどこ？　答えなさい」
「ここ」
空き巣がアーフ、とあくびする。花瓶を振り抜いてお休み頂こうかと思ったが、ふと鯉口シャツの豹柄が目に留まってスマッシュはやめた。
空き巣のシャツは豹柄というよりベンガル猫柄だ。茶トラのしま模様が斑点になったブラウンスポッテッドタビーで短い毛がみっしり詰まった、ガルの毛そっくりなボアだ。
「まさかガルの皮を・・・・・・」
胸の奥地が凍りつく。花瓶を持つ指から力が逃げそうで、ぐっと握り締めた。
「コロス」
「はっ？」

ガル柄の猫耳がビクビクッと動く。最近の猫耳はよく出来ているらしい。
「ひどい。ガルの皮はがして着るなんて。ガルはね、凶暴だけどごはん食べながらアウアウしゃべるのがバカっぽくて可愛かったんだから」
靴のまま玄関から廊下に上がり、空き巣との距離を詰める。空き巣は四つんばいのままポカーンとして、それから眉間を凶悪に歪ませにらんできた。
「喜んで食ってやってるのにバカっぽい・・・・・・だと」
「ガルが縁側で寝返り打って転げ落ちて、恥ずかしいから何事もなかったようにスタスタ歩き去るんだけど足を痛そうにピクピクさせてたのを思い出すたび、都会でのさびしい一人暮らしも癒されたものだった・・・・・・！」
「死ぬほど笑ったくせに思い出し笑いまでして癒されてんじゃねェ・・・・・」
「まだある。ガルは保温されてるバスタブのフタの上があったかくて好きで、よく昼寝してた。けどある日、フタがあるものだと思い込んだガルはフタに飛び乗ったつもりが、つめたーい水が張ったバスタブにばっしゃーん・・・・・・」
「沸かすのを忘れてたおまえがいけない！」
「それから普段ガルがなめてかかってた近所の犬、チワワが散歩中にリードが外れて走ってきたときガルは」
「飛び上がって逃げ出したりしていない！」
「飛び上がって逃げ出した上に生垣に突っ込んで、チワワに尻を」
「言うな！」
ガシャン、と花瓶の割れる音が響いた。突き飛ばされて視界が仰向き、背中に衝撃が走った。自分の体勢を理解したときには空き巣に組み敷かれていた。
「言ったら首を噛み切ってやる。忘れろ」
犬歯にしては鋭すぎる牙が覗いて威嚇してくる。見下ろす硫黄色

の目が誰のものか思い出した。少し欠けた耳はボス猫と縄張り争いしたときの名誉の負傷。
「ガル・・・・・・？」
「だから」
空き巣が浮かべた表情は、猫より高圧的だった。
「最初からそう言っている」
「だって。だってガルは猫・・・・・・」
捕らえた獲物の動揺がお気に召してしまったらしい。にやりと凄艶に持ち上がった口角を舌がうまそうに舐めている。
「猫又昇進。これからはおまえの好きにいじれると思うな」
「ねこまた！？」
年老いた猫が変化したもの、だっただろうか。尻尾が二股になってたり、後ろ足で立って歩いたり、人に化けたり、あんどんの油を舐めたり。化け猫とは違うのだろうか。細かいところはあいまいだけど、確かなことがひとつある。
「それってつまり妖怪、ひゃっ」
空き巣あらためガルあらため猫又が頬に頬をすり寄せてきた。
「早くよこせ・・・・・・」
「な、何を」
金茶の髪のあいだから、不満げな瞳がちらりと覗く。
「とぼけるな。据え膳は食い尽くす主義だ」
猫耳の柔らかい毛が耳たぶをくすぐる。首筋に熱い吐息がかかる。再び顔をすり寄せられ、下腹部がぞくっと騒いだ。
ガルが人のかたちになったのも、猫又になったというのも悪い冗談みたいだ。
けれどこうして触れられて、深く濃く妖艶なオーラを肌で直接感じてしまうと、相手が人間じゃないことがストンと納得できてしまう。惑わされて、このままトロリとした世界に連れて行かれそうだ。
「早く」
人間より少し高い体温をはらんだ手が胸に乗ってくる。あ、と思

わず声が漏れた。隙を逃さず、相手は甘い声を耳に注いできた。
「早く猫缶をよこせ。老猫用のは飽きた。あらほぐしか角切りにしろ」
「・・・・・・・・・・・・・」
玄関の外でキキッ、ダダダダと自転車のブレーキ音と足音がして、ドアがばーんと開いた。ハッとのけぞった駐在がもたもたと警棒を抜く。
「そこまでだ、空き巣！　本官と代われ！」
「なんだおまえ・・・・・・」
バチバチッと静電気がはぜるような音がして、金茶色の髪先が浮くように広がる。猫又の鋭い牙の奥からシャーッとけんか腰な、とは控えめにも言えない殺気満々な威嚇が放たれた。
「おまえ縄張りに踏み込むからには、三味線になる用意はあるんだろうな？　毛は貧相だが、叩かれればよく鳴きそうな顔をしている」
「ひ、ヒィィィハァハァ」
「駐在さん。歓喜と期待の目でわたしを見ないで下さい」

コスプレマニアの彼氏を間違えて通報してしまいました。

「コスプレマニアの彼氏を空き巣と間違えて通報してしまいました」
駐在は玄関扉の裏からガル（猫又版）をジト目でチラ見しながら、名残惜しそうに細かく頷いた。
「そうッスか・・・・・・警察官のコスプレをご希望のときは、ぜひ本官に連絡を」
「着物と猫耳でなければ萌えません。そっとしといて下さい、さようなら」
とぼとぼと未練たらしく帰って行く駐在を見送った。駐在の悲鳴に何事かと出て来ていたご近所さんに愛想笑いしてから玄関を施錠する。
終わった。集落みな顔なじみ、噂筒抜けなこの地域を『着物猫耳萌えで祖母の留守中に玄関先で彼氏とイチャつく女子大生』と指さされながら再訪するMな根性は持ち合わせていない。
玄関にしゃがみ込んで沈んでいると耳を引っぱられた。歯で。
「メシ」
金茶の頭をはたこうとしたら、サッと逃げられた。体は人間でも運動神経は猫らしい。
「ガルがいけない。全ていけない」
「おまえの愚痴で腹は膨れない」
ひとつ学んだ。猫の言葉なんて聞けないほうがいい。
しぶしぶとバッグから持参した猫缶を取り出し、ガルに投げ付けた。四つんばいのくせにひょいひょいと身軽によけられてしまう。人間の姿でサーカス団員にもできそうにない身のこなしが気味悪い。
「ヒト形に半端に猫耳と尻尾を残す意味が分からない」
「人面猫は美学に反する」
「何も残すなって言ってるの！　それになんで着物なの？　ベンガルって外来種のくせに」

「Ｄｏ　ａｓ？」
「Ｒｏｍａｎｓ　ｄｏ．」
「郷に入らば郷に従え」
「英語な時点で全然郷に入ってないじゃん」
「祟るぞ。・・・・・どこへ行く気だ」
「ちょっとネコイラズ買ってくる」
「開けてけ」
ぱしーん、と猫パンチされた猫缶が板の間を滑ってきた。
「そんなの自分で」
やればいいじゃんと言いかけたところで、ガルの白々しいとぼけ顔にひらめいた。この傲慢な猫又が最初はおとなしくひざまずき降参の体勢を示していた理由が。
玄関扉に手をかけたわたしと、板の間でカエル座りな猫又のあいだに緊張感が漂う。
「あれー。もしかして猫又ガルさん、缶詰の開け方をご存じない？」
ボサボサ頭はフンと横を向いた。
「知っている！」
「へー。じゃあもしかして、前足が使えない？」
シュゴッと板の間が鳴った、と思ったら猫缶が飛んできて額に当たった。使えるぞ見たかコラとガルの高飛車顔が語っている。凶暴猫は猫又になっても凶暴だった。
「使えるなら自分で開ければ」
逆に言えば猫又になっても猫は猫。主従関係ははっきりさせねばならない。飼い主（代理）の尊厳を精一杯かもし出して胸を張った。
しばらくのにらみ合いのあと、本当に祟るからなと呟いてガルは缶を引き寄せた。ひざをつき、左手で缶を押さえ、右手の指をプルトップにかける。
がくりと肩が揺れて、ガルは前のめりにバランスを崩した。
果敢にもう一度トライするが、またバランスを崩した。そのさまを優越感に浸りながら飼い主（代理）の温かい眼差しで見守ってや

った。
「・・・・・・慣れないだけだ。猫又になって時間が経っていない、だからだ」
ガルは屈辱と憤怒を肩から噴火させている。いい図だ。密かに動画を撮っている自分をほめなければならない。
「なるほど、そうですか。新米猫又ガルさんは二足歩行ができないんですか」
玄関に転がっていたのは、足で立ち上がろうとして失敗した結果だったに違いない。拳を握っていたのは、手が前足である感覚が抜け切っていないのだろう。
「ガルさんてばやだなー、驚かせないで下さいよ。人間の姿は見かけ倒しなんですね」
「その通りだ」
突然、ガルは満面の笑みを咲かせた。人懐っこい猫のご機嫌の顔。髪が金茶で肌がベージュで瞳が硫黄色という慣れない色あわせだが、悪くないのだ。性格の悪さに反比例したように、むしろいいのだ。その顔で笑いかけられればドキリとする程度には。
「猫又になるには歳が足りていないのだ。十五歳を過ぎてから猫又に変化すれば最初から二足歩行できると聞いたが、待てなくてな」
ガルが四足歩行で近付いてくる。ライオンの形態模写をするダンサーみたいにその動きは自然で滑らかで威厳に満ち、そしてどこかうやうやしい。
「だから手を使おうとするとバランスが取れない。おまえにひざまずいて慈悲を請い、缶を開けてもらわねば飢え死にしてしまう」
端正な顔に憂いの影が差す。ガルのプライドを傷つけたのが分かった。猫は誇り高い生き物だ。後悔と焦りが胸に吹き荒れる。
「う、うん。なんかごめん。立場を理解してもらえばいいの」
そっと腕を伸ばして猫耳の立つ金茶の頭に触れた。すべすべだ。謝罪の印に丁寧に撫でてやる。ガルはうっとりした微笑で愛撫を享受した。

「そうだ。立場を理解していなかった。猫又が猫缶を食べる必要がどこにある。人を食うほうが手っ取り早い。さて、立場が明確になったところで、慈悲を請うべきなのはどっちだ？」
即座に全ての猫缶を開けさせて頂いた。
フライングで猫又になった猫ガルは、手を使って食事することができなかった。床に置いた据え膳、つまり猫缶で満たしたボウルからアウアウ鳴きながら食べ、耳をハッとさせたのちアウアウをやめてガツガツと食べ、飼い主（代理）さまに口を拭かせた。
人間の舌では構造的に水を舐めとるのが難しいとゴネて、飼い主（代理）さまにコップを口元に捧げさせ介助させた。
「老猫介護・・・・・・」
「猫又としてはとても若い」
「じゃあ育児」
「おまえを食べるのは延期してやったが、爪とぎ板にしないとは言っていない」
「凶暴猫と言ったのは間違いでした。性悪猫でした」
「猫又だ」
満腹の性悪猫（又）は下半身をコタツに突っ込んでごろーんとしている。早く二足歩行してくれないとデブ猫（又）まっしぐらだ。
「この体は寒い」
と、朱色のどてらに愛しそうにくるまっている。食事にも防寒にも不便なら、無理して猫又になったりしなければよかったのに。
目を細めて寝入りそうなガルの横に、正座で座った。
「ガル。おばーちゃんのことなんだけど」
「ん」
話しかけてよろしい的な鼻に抜ける吐息が返ってきた。猫ならそんな気位の高い態度も可愛いのだが、人（プラスふざけた猫耳と尻尾）の姿でやられると殺意が湧く。
「おばーちゃんはもう、この家に戻ってくることはないと思う」
「・・・・・・分かってる」

ガルは髪と同じ金茶色のまつ毛を伏せたまま、寝言みたいに呟く。
「サトさん言ってたからな。次、やっちゃったら終わりだって」
ガルが身を縮めると、長身には小さすぎるコタツが引きずられて動いた。
猫は痛くても鳴かない。不調を押し隠して安全な場所へ行き、体を丸めてじっと耐える。
コタツ布団に潜り込みきれていないガルの背中を撫でた。
「今朝、お見舞いに行ってきたの。おばーちゃん、ガルの心配してた。両親のマンションもわたしのアパートもペット禁止だから」
「構わない。ヤマネコだからな、山で狸でも狩れば生きていける」
おばーちゃんはベンガル猫を周囲にもガルにもヤマネコだと言い張って飼ったようだ。
「それは構わないのだ。だが病院のペット禁止は構う」
「・・・・・だから猫又になったの？　人の形なら、おばーちゃんに会いに行けるから」
「他に方法はない」
「いい子だね、ガル」
金茶の頭がもそりと動く。催促の気配がしたので、頭もいっぱい撫でてやる。またもそりと動いて、硫黄色の目が覗いた。遠くを見ている。
「サトさんが入院すると、おまえは必ず来る。おまえがいれば病院について入れる」
「そうだね」
「玄関でおまえが来るのを待っていた。動かないサトさんが運ばれて行ってから、ずっと」
「うん。待たせてごめんね」
「ずっとだ」
「うん」
「だから今、猛烈に猫砂が必要だ」
「・・・・・・我慢！　我慢してちょっと待ってえ！」

猫又に正しい人間男性流のトイレの仕方を指導・・・・・・できたのかどうかは不明である。彼氏に扱い方を教わったが、あれは応用編だ。
基本的な狙い方とか振り方とか、自分だって知りやしないのだ。持ち方さえ謎なのに、前足が手として未完成だからって涼しい顔で「持て」とはどんな痴漢だ。
「大体なにこの服！　シャツはベンガル柄だからいいとして、半股引ってなに！」
「サトさんがテレビでよくこういう格好の男たちを見ていた」
おばーちゃんの好みに合わせて毛皮を変化させたらしい。おばーちゃんがエイリアン好きだったらどうする気だったんだ。どうせ和服なら袴とか狩衣とか、かっこいいのがよかった。
「脱がせ方分からなくて焦ったじゃん！」
「次からはモタつくなよ」
「自分でやれ！　そしてちゃっかり大きくなるな！」
「冬恋の季節だしな」
「そこだけ人間ぶった言い方しないでよ、冬の発情期でしょ。去勢しなかったおばーちゃんを恨む・・・・・・」
嵐のトイレタイムをどうにかクリアし、精根尽き果ててコタツに這い戻る。わたしまで四足歩行だ。ガルのすっきり爽快顔が憎い。
「あのさ・・・・・今からタクシー飛ばしても病院の面会時間に間に合わないんだ。明日ぜったい連れてくから、二足歩行の練習して」
立って歩けない長身の猫又ガルを背負ったら、一歩進む前に背骨が折れる。それにあちらの筋の御用達シャツ（ベンガル柄ボア）に朱色のどてら羽織った猫耳金髪頭とは、できるだけ離れて行動したい。
ガルはごろんと転がって、ガラス窓から庭を見上げた。冬の空を温かな橙色が染めている。
「夜が晴れるなら」

金茶頭が月を仰ぎ、冴えた光をじっと身に受けている。

金茶頭が月を仰ぎ、冴えた光をじっと身に受けている。吐息が白い。

月の精気を浴びる、と言ってガルは肌を刺す寒さの中、暗い縁側でぴくりともしない。昼間にコタツに埋没していたのと同じ体とは思えない忍耐強さだ。薄い半股引に草履で残りはナマ足の下半身は見ているだけで鳥肌が立つ。

日付が変わっても置物と化しているガルに声をかけるのも気が引けて、一人で先に寝る支度をした。ガルは猫のときでもふすまを開けるくらいはやってのけた。月光浴が終われば自分でガラス戸を開けて帰ってくるだろう。

奥の部屋にあるおばーちゃんのベッドを借りたかった。が、ガルがやっぱり戸を開けられずに凍死したら高確率で祟られそうなので、近くにいることにする。

ガルのいる縁側がついた和室へ客用布団を引っぱり出し、冷たさに震えながら潜り込んだ。常夜灯の下、半開の障子とガラス戸の向こうで背を向けている朱色のどてらを眺めながら手足をすり合わせる。

「おばーちゃんはすごいね・・・・・・」

ベンガル猫をヤマネコに、そして猫又にまで育ててしまった。

ヒトの形と言葉を得ると猫の愛情がどれほど強いか、思い知らされる。

ガルがおばーちゃんを「サトさん」と呼ぶ声には甘えと信頼がたっぷり染み込んでいて、無表情を装っていてもむしろ逆効果だ。聞いてるこっちの背中がウズッとする。

手が自由にならない四足歩行ではどてらを着るのも一苦労だっただろう。おばーちゃんの匂いがするであろうどてらに頬ずりして目を細めるなんて、人間ならストーカー認定の愛情表現だ。

慕うおばーちゃんが倒れ、待っているしかできないもどかしさに耐えかねたガルは、動物と妖の越えがたい壁をブチ抜いた。飼い猫としての安泰な環境を捨ててまで、人に化けて会うほうを選んだ。純愛だ。

猫又って他にもいるんだろうか。猫又山や猫魔ケ岳みたいに猫のつく山は猫又伝説があった場所だと聞いたことがある。そんな山奥には猫又の集落があって、若いメス猫又もいたりするんだろうか。

ガルがおばーちゃんと別れを告げられたら、猫又村を探して送って行ってあげよう。どう猛で短気だけど二足歩行もできない新参だ。年寄り猫又が根性叩きなおしてくれるだろう。

まっとうな猫又に更生すればメス猫又と幸せになれるかもしれない。おばーちゃんのために妖になるほど愛情深い一点はある。一面というには性悪すぎるので点だ。

送るときには鰹節とダウンジャケットを持たせてあげよう。どてらじゃメス猫又に引かれる・・・・・・。

カラカラとガラス戸の音に目が覚めた。いつの間にか眠っていたらしい。ひゅうっと寒風が吹き込んできたので首をすくめ、布団をかき寄せた。

そこへボッサァァ、と勢いよく冷えた塊が侵入してきた。

「うきゃー！　つ、冷たっ、何すんの、せっかく人があったためた布団にー！」

「恩知らずめ。散々連れ込んだだろう」

「人聞きの悪い！　毛皮のあったかい猫なら湯たんぽだけど、今のガルは布団に入れる価値がない！　全くない！」

「毛ならある。部分的に。頭と、」

「見せなくていいんだ痴漢！」

「トイレで見ただろう。今さら何を恥ずかしがる」

布団から蹴り出そうとするが、ビクともしない。ガルは身を丸めて頭を胸に、こともあろうに胸にすり寄せてきた。

「寒いっ、心臓止まる、殺す気かー！」

「死ぬと冷たい。死ぬな」
自分が暖を取りたいから死ぬな。そんな自己中な理由で死を禁じられた人って今までいたんだろうか。
ガルの頭をつかんで、むぎぎと力と怒りをこめ押し離そうと試みる。悲しいほどビクともしない。
ふと触れた猫耳が夜露に湿ったみたいにしっとりと冷たくて、ためらいが生まれた。寒さの苦難に耐えたのも、おばーちゃんに会いたいがため。メス猫又との未来を考えてやるなら、愛情深い一点は伸ばしてやるべきだろう。
「もー。しょうがないな・・・・・・それで？　月の精気で二足歩行できるようになったんだよね？」
「文句なら、月を隠した雲に言え」
「出てけ」
猫又排斥運動を再開したが、ガルは腕のあいだにするりと割り込んできて、逆に取り押さえられてしまった。ぴったりと凍えた体を重ねて体温を強奪され、息が止まりそうになる。
冷え切った鼻先が触れてきた。見下ろす瞳孔がきらきらと光っている。赤、緑、黄、瞬時に様々に色を変える瞳孔のイルミネーション。その艶やかさに目が離せなくなる。
「月では足りない。だからおまえの精気をよこせ」
なーおぅ、と発情期特有の鳴き声に似た吐息はそれこそ獣欲と呼ぶべき欲望がむき出しで、本能をわしづかみで引きずり出された気がした。
肌の感覚が一気に鋭敏に研ぎ澄まされる。ざらりとして使い方を心得た猫の舌が煽り立ててくる。その度に体が小さく跳ねてしまうのは、密着している相手にはごまかしようがない。オーロラを思わせる幻想的な瞳孔が嬉しそうに瞬いた。
寒さと熱さが交錯して脳が惑わされる。脚のあいだに熱が息づき、背筋をはい上がって意識をぼかした。
伏せろと言われ、なぜとも考えずうつ伏せになる。人間より体温

の高い生き物が、さらに体温を凝り固まらせてのしかかってくる。首の後ろを甘く噛み留められた。野性のままに腰を反らす。
幾度か阻まれたあと、耳元で忌々しげなうなり声がした。
「脱がせろ。脱げ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
夢見心地だったガルが縁側から転げ落ちたときも、こんな興ざめな気分だったのだろうか。
「やっぱり四足歩行とやるのは間違ってると思う」
「人間のやり方など知ったことか。四足歩行でも交尾はできる。精気をよこせ、二足歩行しろと言ったのはおまえだ」
「おばーちゃんのためとはいえ、人の道を踏み外したくない。だいたい、サトさんサトさん言っといてこれ浮気だよ」
「は？　主とメスは別だろう。メスならなんでもいい」
渾身の蹴りで、人間にも動物にも急所である場所は妖怪にも急所であることを立証してやった。

へっぴり腰は、慣れない二足歩行のせいにした。

翌日のガルがへっぴり腰だったのは、慣れない二足歩行のせいということにした。

飼い主（代理）のしつけは効いたらしい。朝まで震えながら月光浴にいそしんだガルは、ヨタつきながらも足で歩いた。おじーちゃんの遺品である帽子とコートで猫耳と尻尾とおかしな和装を隠し、念願かなっておばーちゃんの見舞いに行ったのだ。

病院で同室なのが耳の遠いお年寄りで助かった。猫耳青年のガルがおばーちゃんに顔をすり寄せ、なうなうと甘え鳴くのを聞かれたら。説明したくない。昨晩、あんなのと未遂してしまった悔いが重なり首をくくりたくなるだろう。

やはりおばーちゃんはすごかった。帽子とコートを脱いだガルを見るなり、「おやガル。男前になったじゃないか」と手を叩いて喜んだ。無言で照れるガルを「でもヤマネコらしくなくなっちゃって、がっかりだねえ」と奈落に突き落とすのも忘れない。

ガルはベッドの下に潜り込んでいじけだした。

「ガルはおばーちゃんに会いたくて無理に猫又になったんだよ」

さすがに哀れなのでフォローしてやる。

「そうだねえ。今度ぎっくり腰やったら一人暮らしは終わりだって、あの過保護息子に言われちゃってるからねえ。動物禁止のマンションじゃあガルを連れてけないから、踏ん張ってたんだけどねえ」

「・・・・・・連れてく？」

ベッドの下から困惑の声がした。

「もうあの家には戻れないねえ。ま、あの家もアタシもガタが来てたし諦めるかね。そういうわけだからアンタ、ガルをもらって帰っておくれよ」

「わたしのアパートもペット禁止だってば！」

「あの格好なら人間に見えるだろ？　男を連れ込むなら問題ないだ

ろう」
「ペットより問題だと思います」
引越しに伴う飼い猫問題で騒いでいると、ベッドの下から金茶の頭が覗いた。ガルは不機嫌そうに眉根を寄せている。
「捨てる相談をしているように聞こえるのだが」
「そうだ、おばーちゃん。ガルは山に入るって宣言してたよ。猫又村に捨て・・・・・・託そうよ、猫又は猫又同士で」
「アンタには人の血が通ってないのか。一体誰に似たんだ」
「おばーちゃんだと思う」
隔世遺伝問題で騒いでいると、ベッドの下からベンガル柄鯉口シャツが出てきた。イラついた尻尾が左右に振られて床を掃除している。
「信じたくないが、最後の別れになるというのは住みかの障害か。生死じゃないのか」
「はい？　ガルはおばーちゃんが死ぬと思ってたの？」
「アタシを食う気じゃないのかねえ？　猫又は飼い主を食い殺すって言うからねえ。やってごらん、返り討ちにしてあげるよ。ふはは。ぎっくり腰だからって、猫なんかに負けないよ」
「猫又だよ、おばーちゃん」
ガルはぼーっと座り込んでいる。何か大きな誤解をしていたらしい。早まった、とか呟いている。
「そういうわけだからさ、ガル」
おばーちゃんに呼ばれて、硫黄色の瞳がぼんやりと仰向いた。
「孫に可愛がってもらうんだよ」
「可愛くない猫又は可愛がれません」
「たまに会いに行ってやるからさ。ひ孫を仕込んでおくんだよ」
「おばーちゃん、自分が何を言ってるのか分かってるの・・・・・・」
自ら進んで仕込まれそうになったとは口が裂けても言えない。
「・・・・・・主はサトさんだ」

姫に忠誠を誓う騎士みたいに、ガルはベッド脇にひざまずいて断言する。しわだらけで朱色のどてらを羽織った（かつての）お姫さまがにっこりと優しく微笑む。
「ガル。猫又だろうがベンガルだろうが、ガルはアタシのヤマネコだ。たとえドブ川だろうと、たくましく生きるんだよ」
わたしのアパートをドブ川と言われた気がする。
関節と血管の浮いたおばーちゃんの手が、金茶の髪をわしゃーと撫でた。ガルは目を細めて受ける。
「主はサトさんだ」
「なあに。猫は家に付くって言うじゃないか。エサさえやりゃ、ガルもアンタに乗り換えるさ」
「本人の前でそういうこと言っていいのかな・・・・・・」
今思えばあれば、落ち込んでるガルを放っておけずに連れ帰るだろうという、おばーちゃんの策略だったに違いない。神経質で小心者のおとーさんが、猫又ガルと同居してうまくいくはずがないから。
アパートのベランダへのガラス戸越しに、着流しにベンガル柄の帯を締めて月を浴びる男の後ろ姿が見える。金茶の頭髪に猫耳はない。
毎晩欠かさない月光浴のおかげで、耳と尻尾を残さず上手に化けられるようになった。けれど長く保っていられない。そして服のどこかにベンガル柄が残る。完全な猫の姿も長続きしない。
彼氏に部屋へ入ってもらえない言い訳もそろそろ出尽くした。やっぱり未熟な猫又を飼うのは難しいかもしれない。困ったなと思いながらガルを眺めていると予想通り、せっかちな猫耳がピコンと立った。
大きなため息をついたらしい。猫又が月の下に吐く息は寒空に白く煙った。
ガラス戸を少し開け、隙間から朱色のどてらを突き出す。気配に振り向いたガルの瞳孔は赤や緑にきらきらと輝く。惑わされないように視線を逸らして受け流した。

ガルは黙ってどてらを着込む。長い指が黒い襟を愛しそうに撫でた。邪魔したくないから黙ってたのに、そんな仕草を見るとつい声をかけてしまう。

「・・・・・・おばーちゃんちも、きっと晴れてるよ」

「知っている。視えた」

猫又は月の精気を吸うたびに不思議な能力も強まっているようだ。

「晴れているが、サトさんは寝ている。いびきかいて」

ベージュの肌の口元が困ったように緩んで、奔放な主を懐かしんでいる。餌付けしてるのにガルはなかなか乗り換えてこない。慰めの言葉をかけておいて勝手だけれど、おばーちゃんばかり慕う姿を見せつけられるといじめたくなってくる。

しょうがない。おばーちゃんの思惑に乗ってあげよう。猫又村のメスにあげるのは惜しくなってきた。っくしょーい、とくしゃみだけは人並みな猫又を眺めながら、彼氏への新しい言い訳は何にしようかと考える。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0969r/

ひとねこ半々！

2011年4月22日17時40分発行